

生化学若い研究者の会「第65回 生命科学夏の学校」開催報告

橋本 陽太¹, 川内 里紗²

(¹実行委員長・東京科学大学, ²事務局長・大阪大学)

はじめに

本稿では、2025年8月29日(金)から31日(日)にかけて開催した「第65回 生命科学夏の学校」について報告します。生命科学夏の学校(以下、夏学)は、日本生化学会後援のもと、「生化学若い研究者の会」が毎年夏に企画する日本最大級の若手研究交流会であり、「これからの生命科学研究を牽引する人材の育成やネットワークの構築」を目的として、半世紀以上にわたり開催されてきました。分野を代表する研究者を招いた講演会、活動地域や大学・分野の垣根を越えた若手研究者同士の交流会などを企画しています。

第65回夏学コンセプト「書を置いて、街へ出よう」

本年度の第65回 生命科学夏の学校では、「書を置いて、街へ出よう」をテーマとしました。教科書を読んでいるだけでは得られない知識や、普段の生活では出会うことのない人との繋がりを得ることをねらいとしました。3日間の夏学を通じて、新しい知識と出会い、研究者仲間と交流を深め、未来の社会を考えるきっかけとなることを目指しました。

これを実現するため、科学館の展示見学を通じて参加者同士の交流を深める企画や、様々な立場から科学に携わる講師を交えたシンポジウムなどを実施しました。ワークショップでは、分子・細胞・個体・進化といったスケールの異なる研究をしている講師の皆様にご講演いただきました。さらには夕食・研究交流・懇親会を同一会場で実施し、参加者や講師と会話する機会を増やせる仕組み作りを行いました。これらの取り組みにより、活気あふれる夏の学校になりました。

また、例年よりアクセスが容易な東京都心で開催することで、多くの方に門戸が開かれた会を目指しました。さらに、本年度は65年間の歴史で初の試みとなる「日本科学未来館7F 未来館ホール」を主会場として開催しました。日本科学未来館という、科学と社会が繋がるまさにその場所で夏学を開催することによって、参加者同士が交流を深めながら、共に未来を創造する絶好の機会になりました。

広報では、東京の夜景と生命科学を融合したポスターを、イラストレーターのオオジカオリ様にデザインいただきました(図1)。親しみやすい素敵なデザインのおかげで、効果的な宣伝・広報につながりました。



図1 広報用のポスター

ミクロからマクロまで多彩な講演

ワークショップでは、各分野の第一線で活躍されている5名の先生をお招きしてご講演いただきました。「核酸合成技術の開発と応用」、「軸索輸送の分子基盤」、「発生過程を理解するための合成生物学」、「アリの精子貯蔵メカニズム」、「昆虫の細胞内寄生細菌」と、分子から生態まで幅広く多彩なテーマを取り上げました。いずれの講演も、専門性と分かりやすさが共存した、好奇心の掻き立てられる内容でした。また研究の話だけではなく、キャリアパスや若手研究者に向けたメッセージなども織り交ぜられており、若手の会らしい熱のこもった講演をしていただきました。それに呼応するように参加者からも質問が相次ぎ、濃密な議論を交わすことができました。

科学と社会の接点を考えるシンポジウム

シンポジウムでは、「ラボをとびだせ~社会とつながるサイエンス」をテーマに、講師による講演、パネルディスカッション、未来館常設展の見学、並びに参加者によるグループディスカッションを行いました。昨今、研究が急速に発展する一方、社会への還元を重視する風潮が強まって

いることや、新たな技術に対する適切な合意形成の不足などの課題もあります。そのため本企画では、研究者、政府関係者、SF作家、サイエンスコミュニケーターをお呼びしました。

第1部では、4名の講師の方々が、どのような立場から科学と関わってきたのかについてお話していただきました。研究が社会に受容されるために必要なことなど、研究に携わるうえで重要になる考え方を、複数の視点から教わりました。

第2部では、講師の方々によるパネルディスカッションを行いました。社会とサイエンスをどのように繋げるかというテーマについて議論しました。また、参加者と講演者の双方向コミュニケーションを図るために、Slidoというツールも活用しました。参加者からは300件を超えるコメントが届き、会場を巻き込んだ企画となりました(図2)。

第3部では、参加者自身が研究者、政府関係者、SF作家、サイエンスコミュニケーターの四者になりきって、基礎技術の社会応用をテーマにグループワークを行いました。また、日本科学未来館の展示見学も行い、グループ内での交流を深めるとともに、議論のヒントを見つけることができていたようです(図3)。グループワークを通して、参加者の皆さんが研究に対して新たな視点を獲得するよう有意義な企画になりました。

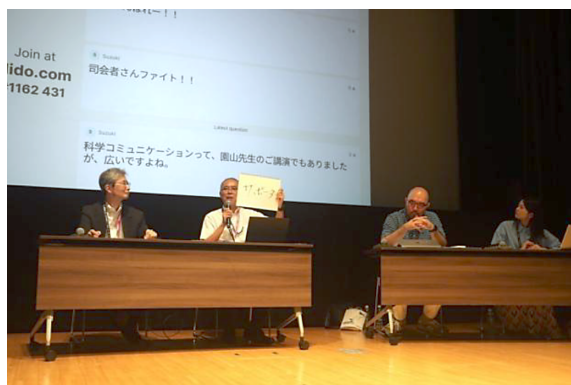


図2 参加者からのコメントを拾いながらパネルディスカッションを進める様子



図3 日本科学未来館の展示を見学する様子

活気に満ちた参加者交流企画

分野の垣根を越えた交流、研究紹介や議論を行う場の実現を目指し、さまざまな企画を行いました。

夏学が開催される1週間前には、有志の参加者によるジャーナルクラブをオンラインで開催しました。学部生と修士学生からなるグループで、ワークショップの講師が執筆した論文の紹介を行いました。当日は50名以上の聴講者が集まり、盛況な会となりました。

夏学当日のポスターセッションでは、45名の参加者による研究発表が行われました(図4)。学会で発表した経験がない方や、研究途中のデータでも発表したいという若い研究者にとって、気軽に参加できる場となりました。また、参加者同士の交流を目的とした企画として、「研究交流会」と「自由集会」も実施しました。研究交流会では、少人数のグループに分かれ、それぞれの研究内容や関心について語り合いました。自由集会では、ラボ生活の悩みや研究で行き詰まっていること、さらにはキャリアパスなどについて、自由に意見交換が行われました。多様なバックグラウンドを持つ参加者が集まる夏学だからこそ、さまざまな視点からの意見が飛び交う時間となりました。東京の夜景を眺めながら、普段なら出会うことのない参加者同士が交流を深める姿は、まさに「書を置いて、街に出よう」を体現しているようでした。

おわりに

本年度の夏学は、全国から139名の参加者が集まり、熱意に満ちた3日間となりました(図5)。参加者からは、



図4 ポスターセッションの様子



図5 夏学最終日に撮影した集合写真

「多彩な研究テーマを持つ全国の学生と交流することができ、モチベーションになった」といった声が多数寄せられ、有意義な会になりました。

生化学若い研究者の会では、夏学の他にも、全国でセミナーを開催する「支部会」や羊土社『実験医学』誌にて若手の意見を伝える「キュベット委員会」活動も行っています。これらにより「研究者ネットワークの拡充・次世代人材の育成」を目指しています。

次回の生命科学夏の学校は、「知を辿り 今を語り 未来を描こう」というコンセプトのもと、2026年8月28日

(金)～30日(日)に滋賀県で開催予定です。ぜひ足をお運びいただけますと幸いです。

最後になりますが、夏学開催にあたり多大の支援を賜りました日本生化学会をはじめとする法人・企業・団体・個人の皆様、お忙しい時期に講演を承諾していただきました講師の方々、そして1年間準備に携わっていただいたスタッフの皆様に感謝申し上げます。

(生化学若い研究者の会について：

<http://www.seikawakate.org>)